

# 人麿歌集の所収歌

— 卷九・一七二五番歌の左注の範圍 —

森 淳 司

この三説の説明を省略して、注に譲ることとし、やはり私見の結論だけを先に記すと、私はC説をとりたい。Cとみるものは比較的支持者が少ないが、一首とみる理由を以下、書式、用字、類歌などの面から考察してみよう。なお問題の箇所を新校万葉集によつて記すると次の通りである。

槐本歌一首

染波之 平山風之 海吹者 釣為海人之袂變所見 (二七一五)

山上歌一首

白那弥之 浜松之木乃 手酬草 幾世左右二箇 年薄経濫 (二七一六)

右一首或云河島皇子御作歌

春日歌一首

三河之 淵瀬物不落 左提刺爾 衣手湿 干兒波無爾 (二七一七)

高市歌一首

足利思代 擲行舟薄 高島之 足速之水門爾 極爾監鴨 (二七一八)

(二七一八)

—

万葉集に収められている人麿歌集の歌は、(1)その大部分は左注や題詞などによつて、それと知れるものであるが、(2)用字や内容などによつてそれと推測しうるものもいくらか存する。(1)はまた、(1)左注などに歌数を明記しているものと、(2)その明示を欠く場合がある。この(2)の場合は、その排列形式などによつて、卷十などのように、明記を欠いていても、どこまでがその範圍であるかが一見して知りうるものが多いが、卷九雑歌部の左注のように、その範圍が明確でないものもある。

本稿では卷九、一七二五の左注「右柿本人麻呂之歌集出」の、「右」の範圍について私見を述べることとする。

まずいままでの説を、その結論だけ挙げてみると、おおよそ次のように三つに分けられるかと思う。

A、一七一五番歌より十一首とするもの

B、一七二〇番歌より六首とするもの

C、一七二五番歌の一首のみとするもの

春日藏歌一首

照月遠 雲莫隱 島陰爾 吾船將極 留不知毛 (二七一九)

右一首或本云。小弁作也。或記三姓氏二無記三名字一。

或稱三名号二不稱三姓氏一。然依古記便以レ次載。凡如レ

此類下皆效焉。

元仁歌三首

馬屯而 打集越來 今日見鶴 芳野之川乎 何時將願 (二七二〇)

辛苦 晚去日鴨 吉野川 清河原乎 雖見不飽君 (二七二一)

吉野川 河浪高見 多寸能浦乎 不視歎成嘗 恋布真国 (二七二二)

絹歌一首

河蝦鳴 六田乃河之 川楊乃 根毛居侶雖見 不飽河鴨 (二七二三)

島足歌一首

欲見 來之久毛知久 吉野川 音清左 見二友敷 (二七二四)

麻呂歌一首

古之 賢人之 遊兼 吉野川原 雖見不飽鴨 (二七二五)

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

二

卷九雜歌部には、人麿歌集から採録されたと思われる歌が他に一箇所ある。二箇所共、真淵のいう常体、最近いわれている非略体の書式をとっている。しかし常体といい、非略体といういい方は問題

ハ	ホ	ニ			ハ			ロ	イ			歌群	使用字数計
		III	II	I	III	II	I		III	II	I		
1738	1726	1725	1720	1715	1710		1682	1664			25		
1760	1737		1724	1719	1714		1709	1681			24		
1											23		
1	1			1			1				22		
1	1			1			1		2		21		
1	1		2	1	1		1	1	2		20		
2	1		1	1			2	2	5	1	19		
3	4		2		1		3	1	2	1	18		
1				1		1	8				17		
		1					7		2	1	16		
							4				15		
							2				14		
11	12	1	5	5	2	1	2	28	2	13	3	計	

があり、卷九のこの二箇所の場合も、必ずしも卷九の一般の書式と同一ではなく、ある程度の略体的傾向がうかがえる。  
 卷九雜歌部の所収歌のすべてを、その採録資料と思われるいくつかの歌群に細分して、所収歌の順序に従い、短歌一首宛の使用字数を算して、表にしてみると次のようになる。



第一項の最後に記した原文に従つて、この問題の部分の用字を注意して読むと、人麿歌集所出の他の歌群には全く見られないか、きわめて稀にしか記されない文字が眼につく。

まず最初の、

寒波之 平山風之 海吹者 釣為海人之 袂變所見 (一七一五)

から特異な用字につきあたる。初句の「寒浪」はすでに指摘されているように、人麿歌集と人麿作歌を結びつけるに用いられた特異文字である。しかしこれはこの歌を人麿歌集と決めて出された説で、他に人麿歌集のどこかにこの用語用字があるならばともかく、他例のない点から問題にならない。

むしろ四句の「海人」に眼をむける。万葉集では一般に、「あま」を「海人」「海部」「白水郎」などと記すが、果して人麿歌集はどうかと確かめると、「あま」と読むべき例が三例あり、すべて「海子」と記されている。(大系の総索引はこの項に誤字が多く、校本によつて確めると他本に異例はない。) 三例は一八七・一三〇・一三〇三である。なお巻九には人麿歌集所出歌以外の歌に三例の「あま」があるが、それは三例共「海人」であり、この一七一五の歌の用字と同一である。

更に次の歌で、

白那弥之 浜松之木乃 手酬草 幾世左右二箇 年薄経濫

(一七一六)

の「白那弥」の「なみ」は、人麿歌集では「浪」(二四三五・二四三七・二四七二)か「波」(一六九〇・二四三四)が用いられているのに、この例はそれに反している。しかし、このような「海人」

や「那弥」の用字は、或は時により一般的なものに従つたり、場合により特殊な試みによるという偶然の結果も考えられる。

だが、この歌における助詞の用字は、人麿歌集では全く見られぬものがある。それは、「幾世左右二箇 年薄経濫」などの(ハ)、左右、(ウ)、二、(イ)、箇、(ニ)、薄は、それぞれ人麿歌集一般には全く用いられないかきわめて珍しい用字である。すなわち、「まで」は人麿歌集では、十六例あり、「及」(十三例)が一般に用いられ、巻九の前項の表の「ロ」なども「及」が使われているし、二字で表記される場合は、諸手、麻手、麻豆、が各一例あるのみである。「二」も人麿歌集では、「爾」(六十八例)が圧倒的に用いられ、その他は「丹」(十七例)「丹」(八例)「於」(三例)で、「二」の例はわずかに二例にすぎない。しかし「二」のⅡでも「見三友敷」(一七二五)などと用いられ、この十首の歌群は、人麿歌集の用字傾向と相違していることを示している。それにつづく「箇」も人麿歌集では、「可」(四例)「及」(三例)「耶」「哉」「香」(各二例)「架」(一例)で、相反する。最後の「薄」は、つづく一七一八でも「舟薄」と用いられているが、人麿歌集の全用例では「者」(九十七例)が一般的で、例外の「波」(四例)「羽」(一例)はすくなくない。もとより巻九の例の「ロ」の部分はずべて「者」(十四例)である。特殊な用語の相違においてではなく、助詞などのように用例も多く、しかも無意識に記される可能性のより多い用字において、このような相違は、資料の相違による筆録者の相違とみるより他はないであろう。

このことは、この二首に限るわけではない。「二」のⅠⅡに共通

にいえる人麿歌集との用字の対立である。その他で対立する用字を  
 図表化して示せば、

助詞、助動詞などの用字の相違

二のⅠⅡ	口	人麿歌集の用字とその用例数
代	而八	而三二、三二、
能	乃八、之三、	之八一、乃三五、能一、
遠	乎五、矣一、	乎三五、矣六、緒、少、遠(各一)
監	1718	兼五、陰二、祁矣一、

その他の用字の相違

二のⅠⅡ	人麿歌集の用字と用例
濕	1717 沾 1688・1696・1697・2240・2395 潤 2429
友敢	1724 乏 1702・1997・2002

などとなり、用字の対立はほぼ決定的といえよう。

以上は、巻九「口」の歌群をはじめとして、人麿歌集一般には全く使用されないか使用される可能性のきわめてすくない用字を助詞などを主として問題の歌群「二」のⅠⅡから求めたものであるが、四百首にも近い人麿歌集に、しかもしばしば用いられる助詞などで、歌集には殆んどその用字例がみられないにもかかわらず、この歌群にこれ程、異例が重なり合うということは、これを歌集歌の例外として扱うより、前の書式の傾向と相まって、歌集歌以外の資料

によつたとする方が穏当な判断といえよう。

なお「二」のⅢ(一七二五)は左注のあり方により、人麿歌集歌に間違いはないことはすでに述べたが、わずか一首の故に、用字面で積的に歌集歌であることを立証することは殆んど困難か不可能と思われる。しかし、その妥当性をわずかながら語つているものが前項の書式だけではなく、用字においてもみられる。それは三句の「遊兼」の「兼」である。「二」のⅠでは、一七一八に「極爾監」とあるが、この「けむ」の相違は、前の表で示したように、人麿歌集はその多くは「兼」で、一七一八のような「監」は一例もない。これによつてみれば、一七二五は人麿歌集一般の例に合い、他の「二」のⅠの一例はやはり異例となる。これらのことは、その用例の一つだけを取つても決定的に判定しえないが、これらの例が重なり合うところに、やはり原資料の用字の相違の反映とみなさざるをえなくなり、一一五以下一七二四までは人麿歌集の可能性が稀薄となるかに思えてくる。

#### 四

「二」のⅡは、吉野川に遊んだ数人の一連作であるが、森本治吉博士は、かつて、この一連の作について、「一首も離宮を詠んでいないのは、吉野の詠作としてきわめて特異なもの」としておられる。たしかにこのことは吉野詠としては珍しい。しかし、この「二」のⅡの五首と、その発想の類似した歌群が万葉集中に他に一箇所、一つの連作としてみられる。それは巻七の一一〇三より一一〇六までの四首で、今、「二」のⅡをA歌群とし、巻七の一連の作

をB歌群とし、表現や内容を理解しやすく、かな交り文にし、A、B両歌群の排列の順序をすこし変えて欠のように並べてみる。

A 歌群 一七二〇〜一七二四、

B 歌群 一一〇三〜一一〇六、

- 1 今しくは見めやと念ひしみ芳野の大川淀を今日見つるかも (B)
- 2 音に聞き目にはまだ見ぬ芳野川六田の淀を今日見つるかも (B)
- 3 河蝦なく六田の河の川楊のねもころ見れど飽かぬ河かも (A)
- 4 河蝦なく清き川原を今日見ては何時か越え来て見つつ思はむ (B)
- 5 馬並めてうち群れ越え来今日見つる芳野の川をいつかへり見む (A)
- 6 馬並めてみ芳野川を見まく欲りうち越え来てぞ滝に遊びつる (B)
- 7 見まく欲り来しくもしるく吉野川音の清けさ見るともしく (A)
- 8 苦しくも晚れぬる日かも吉野川清き河内を見れど飽かなく (A)
- 9 吉野川河浪高み滝のうらを見ずかなりなむ恋しけまくに (A)
- 2と3の歌の地名の「六田」は万葉集中にこの二例A B両歌群だけで、それだけからは両歌の関連は考えられないが、3と4の「河蝦なく」の初句など、また5と6の「馬並めて」の発想など、共に集中でも短歌の初句にくることなどきわめて例のすくないことで、これらがA・B両歌群にそれぞれ一例ずつ存するなどは、この両歌群が、発想の基盤が類似していることを意味しているようである。

また、6と7のA・Bで、「打ち越え来る」という表現なども、「打ち越え見る」や「打ち越え行く」などの例は二三見えても、きわめて珍らしい表現上的一致というほかはない。

このような、万葉集中に特に珍らしい類似句が、頻出して、この

わずか四、五首の二つのそれぞれ別の巻の歌群に集まっているといふことは、両歌群に何らかの関連が予想されはしまいか。

勿論Aの歌群は、その題詞によつて、元仁、絹、島足といった人物の個々の歌であり、Bの歌群は、それが同一人か、別個の作者によつてなるものがさだかではない。また、A歌群は、森本博士の言に従えば、吉野へ来て、いまだ宮滝にいたつていないのに反し、B歌群は、6などによれば「滝に遊びつる」などとあつて、宮滝に到つたであろうことが推測しうるが、表現のこれほどまでの類似は、このA B両歌群が、全く無関連に成立詠作されたことをこばむものがある。

この両歌群の形成上、表現上の以上のことのほかに、この二つの連作の底にあるものは、長い間あこがれていて、はじめて吉野の地、吉野川を現に眼前にし得たよろこびであろうが、これは、たびたびの行幸にしばしば供奉したと思われる一般の万葉集中の吉野詠とはちががつた、はじめてのおどろきやよろこびがここには見られるように思われる。その行程が、たとえ六田までであつても、宮滝までのことであつても、このおどろきやよろこびは、両歌群を貫いて流れている。これは、その字句の類似点を併せてみて、はじめて吉野川を訪れた人達の同一心情での一回的な感慨とみて差支えないのではなからうか。

これらの歌に対して、一七二五番の人麿歌集歌はどうであらうか。古の賢き人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも

これは、前の1より9までの歌に比するまでもなく、その発想があまりにも観念的、懐古的であり思索的である。一方がはじめての

吉野川辺に、飽くことを知らず見入つてゐるのに対して、この一首は「見れど飽かぬかも」と結ばれてはいても、「古の賢き人の遊びけむ」往時を懐古するゆとりがある。ここには、前の一連の歌のようなおどろきやよろこびのなまの感激がみられない。いわば、傍観者としてその風景を賞讃してゐるむきがある。

このことはA B両歌群が、万葉集所収の巻を異にしながらも、ことよると同一資料から分けて収められたという想像をいだかせるのに対して、A歌群とこの一七二五の一首は、前述の書式や用字とも合わせ考えてみて、それとは異なつた人麿歌集という資料から出たものとみれそうである。

しかも、巻九におけるA歌群が、人麿歌集の直前に排列されているし、巻七におけるB歌群も、人麿歌集所出歌のすぐ後に排列せられてゐる。このことをもつてすれば、万葉集の巻七や巻九の採録資料のうち、A B両歌群を有していた資料は、人麿歌集に近い、しかも人麿歌集以外の、たとえば、古歌集などと共に存在し、古歌集などと同列に取扱われた、別の一つの資料だつたのではないかとも想像を推し進めることも可能である。ではなぜ同一資料から出た、十首ばかりのものが、巻を異にして二箇所に分載されたかというに、それは、作者名を記していたか、いなかつたかの相違によるもので、A歌群における作者名の不備な表記をもつてすれば、A B歌群を含む原資料には、その間に作者名を付さずに収められたものもあつていい筈であり、そのようなものがB歌群として巻七に分けられたとも考えられる。A歌群は、一七一九の左注の「古記云云」の記述に従えば、前掲の表（四三頁）の「二」のI II IIIとホにわたつ

て、四つの資料から、姓氏ないしは名字のみの記された歌を摘出して、資料の順序にならべたもので、そのうちに姓氏も名字も記録されない歌があつたとしても、それを採録することは許されなかつた筈である。もつとも事情は逆で、先に、一つの資料からまずB歌群の歌がその作者にこだわらなく採録され、次に同一資料から姓氏か名字を記されたものだけが、その資料の順序によつてA歌群として収められたとみることでもできる。いずれにしても、「二」のII、すなわちこの項でいうA歌群は、人麿歌集以外の資料で、一七二五の一首が人麿歌集所出歌とみることが、その発想内容からも、かつ問題の「古記」の解釈からも矛盾するところはないようである。

以上、書式、用字、発想などの面よりみて、一七二五の左注は、直前の一首をさし、この一首を人麿歌集歌と考えるものである。（本稿は三十七年度「万葉学会研究発表会」において報告したものである。）

補注・紙幅の都合により、本稿に関する諸説を省略したので、その主なものを左に掲げる。

I、一七二五より十一首とするもの。武田祐吉「国文学研究」石井庄司「古典考究万葉編」後藤利雄「人麿歌集とその成立」神田秀夫「動揺する古事記の成立」〔解釈と鑑賞〕二九卷一号〕等。

II、一七二〇より六首とするもの。森本治吉「万葉集第九卷考」〔国語と国文学〕五卷五・六号〕武田祐吉「万葉集全注釈」久松潜「諸著書等」。

III、一七二五の一首とするもの。土屋文明「万葉集私注」沢瀧久孝「万葉集注釈」。